

2016 年度卒業式式辞

2017 年 3 月 18 日（土曜日）

京都造形芸術大学学長 尾池和夫

京都造形芸術大学博士の称号を授与された芸術専攻（博士課程）2名の皆さん、京都造形芸術大学修士の学位を得られた、芸術文化研究専攻（修士課程）および芸術制作専攻（修士課程）、合計61名の皆さん、学士の学位を得られた芸術学部13学科の合計705名の皆さん、まことにおめでとうございます。ご列席の学校法人瓜生山学園役員、副学長、研究科長、学部長、教職員とともに、学位を受けられたことをこころからお慶び申し上げます。ご家族の皆さま、ほんとうにおめでとうございます。

今年の卒業・修了展を見に来られた方は、15521名でした。作品の前に作者がいて積極的に説明してくれました。学科長をはじめ教員もたくさん現場にいて議論に加わってくれました。一般の人たちも熱心に見ていました。また、入学希望の方とご家族が声をかけてくれました。さらに、今年は東京から私の視察に同行したいと、わざわざ来てくださった企業の社長さんがいてたくさんの作品をお買い上げくださったり、日本学術会議の広報のあり方を考える機会にと井野瀬副会長が、漫画やキャラクターデザインを中心に多くの作品を半日かけて見てくださいました。4日に及ぶ全作品の視察はたいへんですが、作品の前でのさまざまなやりとりが、私にとって何よりも楽しいことです。

これから社会に出て働く方々、あるいは進学して研究者や作家への道を目指す方たち、さまざまな進路がみなさんの前にあることでしょう。社会では厳しい試練が待っているでしょう。4年以上の年月を過ごしたこのキャンパスが、明日から皆さんの母校になります。卒業式の機会にもう一度「藝術立国之碑」を読んでみてください。学んだ大学での思い出を大切にしていきたいと思います。

そしてときには学習したこの学園を思い出して母校にも来てください。瓜生山学園では40周年を迎えた機会にホームカミングデーを設定し、学園祭と重ねながら皆さんの訪問を待つように同窓会の仕組みを整備し、この京都造形芸術大学のキャンパスを維持し、改善して行く所存です。

本日学位を授与された方々の作品や論文などから私が興味を持ったものを数点、紹介したいと思います。

小野塚佳代さんの博士学位論文題目は、「戦時下の風刺漫画におけるユーモア—近藤日出造と時局雑誌『漫画』にみる風刺の変遷—」です。論文は、戦時下の風刺漫画をテーマに、漫画の歴史の中でとくに戦争という課題に敢えて視点を定めて研究を進めたものです。近藤日出造を中心に、時局雑誌『漫画』にみる風刺の変遷をたどりました。戦争という人類に固有の社会現象の中で、漫画はプロパガンダとして戦意高揚や戦争賛美のために利用されてきましたが、ある時には漫画は規制され、また悪とみなされ、攻撃的な批判精神を持つ風刺漫画の歴史は、漫画の否定と表現の自由への侵害に抵抗してきた歴史でもあります。今後の研究の展開も期待できる密度の高い内容の力作でした。

大学院賞と同窓会特別賞の東田幸さんの作品『痕跡』は、期間中にどんどん変化していく作品で、私も何度も確かめに行きました。

プロダクトデザイン学科の梶原薫さんの作品は「トランスジェンダーにも利用しやすいトイレ」でした。緻密は分析に基づく具体的な提案であり、この大学でも活かして行けるといいと考え、岸和郎先生に写真を送りました。

学科を超えた連携の展示も目を引きました。例えば文芸表現の小説の単行本の装幀が、他学科の学生との連携で行われました。この中で私はたいへんうれしいことを体験しました。それは小説の装幀の投票に選んだのが、連載の瓜生山歳時記で写真を担当している高橋保世さんの作品だったのです。この水野結さんの小説は、「”場”をつくる喜び ―ミニシアター「進富座」の九十年と今―」という題で、ご実家の映画館と作者の思いを描きました。文庫本になったのを買いたいと思いましたが、すでに完売していました。

マンガ学科の吉元愛紀子さんの作品は「沖縄とニライカナイの魔性使い」というタイトルで、沖縄に伝わる海の彼方、あるいは海底の異界を描きました。吉元さんには昨年、私が日本学術会議の外部評価のための漫画を描いていただいて好評でしたが、そのこともあって今年は日本学術会議の井野瀬久美恵副会長が卒業制作展をわざわざ視察してくださったのです。

情報デザイン学科の学長賞は、井澤真優さん、小野七海さん、篠原美由さんの共同制作、「半纏部 hanten-bu」でした。同じタイミングで卒業制作に行き詰まった3人がグループ制作を決意して実を結んだものでした。親子が参加する半纏制作ワークショップで半纏をお母さんが子供に着せる場面があり「その瞬間にこそこの部活動の意味が集約されていたように思います」という解説がありました。

美術工芸学科の森田具海さんの『2つの川』は、水俣川と渡良瀬川を撮影した力作でした。丹羽優太さんの『大山椒魚濁流図』では畳に坐り込んで見入ってしまいました。島内梨佐さんの『吉田鉾』は、世界最大の点描という評価とともに注目されました。

今回を含めて、京都造形芸術大学で学位を得た方は、現在までに、博士39名、修士951名、学士10483名になりました。皆さんが世界の各地で活動しています。進学する方も、社会に出ていかれる方も、心身の健康に気をつけてご活躍くださるようお願いいたします。

芸術の力で、世界の平和を実現するという『藝術立国』の思想は、国境を越えて伝える必要のある思想であり、今日、卒業される皆さんにも、それをさまざまの形で伝える人になっていただきたいと願っています。皆さんには、藝術立国の理念への理解を深め、それを後輩に伝えてほしいと願っています。20年後、あるいは40年後、この学園を皆さんが訪れたときにも「藝術立国之碑」が、大学の理念を伝えているはずです。その理念を今日の式典に参列された皆さんの力で伝えてほしいと願って、私の式辞といたします。

博士、修士、学士の学位を得られた皆さん、まことにおめでとうございます。

ありがとうございました。